

# 「人の本質」

岐阜高山教区 駐在教導 近藤 智隆

今年1月に発生した、令和6年能登半島地震、ご縁があり被災地に赴くことがあり、そこで色々な事を考えさせられた。

被災寺院のご住職と一日、過ごすことがあり、様々な場所を案内して下さったのだが、とある場所に案内されたときに、自分もふくめ人がどれだけ自分勝手な判断で物事を見ているのかを考えさせられた。

その場所は、津波の被害に遭った集落だった。震災が発生した時には津波に怯え、逃げまどっていた。水というものを、自分に危害をあたえる対象として認識していた。それが数時間もすれば、人は水が無いことに怯え始める。飲料水がない、入浴できない、洗濯ができない、一番の困りごとはトイレが使えないといったことに悩まされていく。

普段、意識していない事だが、水という一つのものを例にしても、いかに自分の置かれる立場や、状況によって、自分の命を繋ぐものになったり、命を奪うものと認識してしまう。

もう一つ例をあげるなら、雨も自分の都合でとらえ方がかわってくる。雨が続いたり、大切な日に雨が降ると、人は嫌な気持ちを持つが、雨が降らずに野菜が取れず、高騰したりして家計を圧迫してくると、今度は降らないことを妬むようになる。

こうして自分たちは、水ということだけにおいても、自分自身の勝手な都合で、遠ざけたり、追い求めてしまう。

それは、すべて自分本位に物事を考え行動するからであり、自分の思い通りにならないことが気に食わないという、人の本質でしかない。

他人はもちろん、自然、動物という相手ですえ自分の都合でどうにでもなると考えてしまっている。近年では、人がひとの生き死さえも、自分たちで操作し、思いどおりにしようとしてしまっている。しかしこれが、人の離れることのできない本質なのである。